



## デュルケーム / デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第5号 [2004年12月25日発行]

編集事務局 奈良女子大学文学部

0742-20-3263, 3264

郵便振替口座番号：00980-4-20999

(口座名称)デュルケーム研究会

編集

大野道邦

中島道男

江頭大蔵

<mitikuni@mua.biglobe.ne.jp><mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp>

### デュルケーム / デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中であって、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム / デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的開催する。

### 第8回研究例会 (2004年4月24日、広島大学)

報告1 成定 徹 氏 (関西学院大学)  
デュルケーム社会学における「個人主義」の問題について  
コメンテーター：山田陽子 氏 (関西学院大学)

報告2 清水強志 氏 (創価大学)  
デュルケーム社会学におけるシンボルの役割  
個人の認識行為に注目して  
コメンテーター：野中 亮 氏 (大阪樟蔭女子大学)

### 第9回研究例会 [兼「デュルケーム = ジンメル合同研究会 高野山カンファレンス 2004」] (2004年9月25日・26日、高野山大学)

#### テーマ(1) 近代とポスト近代

報告1 岡崎宏樹 氏 (京都学園大学)  
デュルケーム理論の現代性  
エゴイズム・アノミー・共同体をめぐって

報告2 野村一夫 氏 (国学院大学)  
社会学の終わりとはジンメルのエートス  
ディシプリンの知識空間をめぐって

討論者 小川伸彦 氏 (奈良女子大学) 犬飼裕一 氏 (北海学園大学)

特別コメント ブライアン・S・ターナー 氏 (ケンブリッジ大学)

#### テーマ(2) デュルケーム / ジンメルと現代社会学

報告1 杉本 学 氏 (名古屋大学)  
ジンメルにおける われわれと排除の社会学 とその可能性

報告2 林 大造 氏 (ケンブリッジ大学)  
デュルケームにおける宗教、モースにおける呪術  
：現代社会学における社会像と人間像

討論者 菅野 仁 氏 (宮城教育大学) 油井清光 氏 (神戸大学)

## テーマ(3) デュルケーム/ジンメルと現代社会

報告1 薬師院仁志 氏(帝塚山学院大学)  
社会学とは何であったのか  
現代社会におけるデュルケーム理論の意義

報告2 栗田圭子 氏(上智大学)  
ジンメル『ゲーテ』 モデルネにおける主体と人格

討論者 山下雅之 氏(近畿大学) 川本格子 氏

### 第8回研究例会報告要旨

〔報告1〕 成定 徹(関西学院大学)

#### デュルケーム社会学における「個人主義」の問題について 『社会分業論』の構成と個人主義にたいする批判/擁護

本報告においては、『社会分業論』における、デュルケームの個人主義社会理論批判をとりあげ、これを再検討した。

デュルケームは、「個人主義」にたいして、一見すると矛盾するかのような態度をとっていたことで知られる。デュルケームは、個人主義社会理論に対して批判的な態度をとるいっぽうで、近代社会の構成原理としての「道徳的個人主義」を積極的に擁護しようとしていた。

『分業論』においては、スペンサー社会学に代表される功利主義的個人主義に対する批判が展開されており、また、近代社会の構成原理としての「道徳的個人主義」が提示されている。この点で、『分業論』は、デュルケームの生涯にわたる個人主義に対する態度をすでに内包していたといえる。しかしながら、『分業論』にしばしば与えられてきたのは、そこで議論されている有機的連帯の概念では近代社会における社会的連帯を構成する枠組みが充分には展開されていない、という評価であったといえる。これは、有機的連帯のなかに、何が自律化した諸個人を結びつけるのかについての議論が存在していないように思われるからである。

これは、『分業論』の構成上の特性と関係している。『分業論』は、第1編「分業の機能」、第2編「原因と条件」、第3編「異常的諸形態」の3編から成り立っている。本報告の視座から確認しておくべきことは、第2編が、分業の「原因と条件」の分析であり、同様に第3編が、分業の「異常的諸形態」の分析である、という点である。これらは、連帯の「原因と条件」の分析ではないし、連帯の「異常的諸形態」の分析でもない。つまり、近代社会の連帯の構成を問うにあたって、デュルケームが直接的な「連帯論」ではなく、「分業論」に限定して議論を展開している。

このとき、『分業論』におけるいっぽうの功利主義的個人主義批判の要点を、しばしばなされてきたように「契約における非契約的要素」の指摘にあると考えるなら、有機的連帯における「個人主義」がいかなる要件の下で近代社会の構成原理と成りえるのかは必ずしも明らかではないように思われる。しかしながら、デュルケームが『分業論』において、功利主義をはじめとする先行するいくつかの社会理論についての批判を展開しつつ、近代社会における個人主義の可能性を論じるとき、個人と社会とを何が結びつけるのかではなく、別の視点をとっていたのではないだろうか。

H. アルパートが指摘していたように、デュルケームによるスペンサーやルソーら「個体主義的」社会理論にたいする最も根本的な批判は、それが個人を「前社会的」存在として想定し、たいして社会を「個人の後に現れる現象(post-individual phenomenon)」と考えていることにある。アルパートによれば、デュルケームは、「人間は本来社会的存在」であり、人は社会から離れては存在しえないということを知っていた。つまり、社会が個人に先行するのであり、個人を社会に先行するものと、いいかえれば社会を個人の後の現象として捉えている議論は根本的に誤っていると考えていた。

そこで再検討されるべきは、デュルケームが、伝統社会の分析についてスペンサー批判を展開していたことであり、有機的連帯にたいし常に機械的連帯が先行することを強調していたことである。その要点は、スペンサーをはじめとする功利主義者たちが、「歴史の起源」の認識を誤っており、「個人主義」を人類に先天的に備わったものと考えたという認識の転倒がもたらす錯誤を犯していることを論難することにあつた。つまり、『分業論』において提示されている機械的/有機的という連帯の二類型で示されていることは、一方の機械的連帯においては「個人」と社会が集合意識によって結びつけられているが、他方、有機的連帯においては「個人」と社会がどのように結びつけられているのか、とい

う「個人」と「社会」を「結びつける」という種類の議論ではない。伝統社会においては個人と社会が未分化であり、「個人」そのものが成立していなかった、ということが議論の中心になっている。

したがって、功利主義批判という視点から見た場合に、『分業論』の議論は、個人あるいは個人主義の歴史的発生についての議論を展開するとともに、功利主義にたいしてその認識の転倒を論難することにあつたといえる。『分業論』の問いの構造、論理構成は、何が諸個人を結びつけ社会を可能にするのか、というその後の多くの社会理論がとった構造とは異なっているように思われる。デュルケームは、個人あるいは個人主義について、系譜学的に、あるいは構築主義的にアプローチしようとしていたのではないだろうか。

## 〔報告2〕 清水強志（創価大学）

### デュルケーム社会学におけるシンボルの役割 個人の認識行為に注目して

デュルケームは、一般に「方法論的客観主義者」とみなされ、「個人」あるいは「個人意識」が排除されているとの批判があるが、本発表の目的は、デュルケームにおいて「個人」が社会学の対象から排除されているかどうかを彼のシンボルによる個人の認識行為に注目して検討することにある。

デュルケームにおける認識論を明確にするにあたり、私はカントの「現象と物自体」という二元性および彼が現象と仮象を区別していることに注目する。デュルケームもまた『原初形態』(1912)や「プラグマティズム」に関する講義(1913-1914)の中で、仮象(apparence)という単語を用いている。つまり、デュルケームは主観的な表象にもとづく仮象、つまり、悟性概念カテゴリーによって構成された仮象を物自体に対置させて考えていることが確認される。それでは、人々が仮象しか認識できないという事実は何を意味するのだろうか。(大野道邦先生や野中亮先生が指摘しているように)デュルケームは「社会的事実」をもののように考察するために、内省的な方法ではなく、『社会分業論』では法、また『自殺論』では「自殺率」という個人から独立的かつ外在的に存在する可視的な「シンボル」を通して社会的に(科学的・客観的に)アプローチすることを試みたのである。つまり、主観的意識は常識という「誤謬」に満ちており、それゆえに主観を排除することが社会学において最重要な課題となるからである。それゆえに、「常識」という「誤謬」の奥に存在する1つの「真理=実在」を社会学によって把握できるという観念があつたと言えるのではないだろうか。社会学構築時期における彼の社会学とは、科学的真理を追究するものであり、まさに誤謬としての仮象の奥にある「実在=真理」を理解することにあつたといえるだろう。

しかしながら、『宗教生活の原初形態』において彼は「多元的真理」の概念を追加している(このことは彼の社会学の断絶を示していないが詳細は割愛)。それは、デュルケームが「仮象」の奥に存在する実在だけを真理とするのではなく、「仮象」を眺め生活する社会における実在をも真理と認めるに至つたということである。概念をカントのようにア・プリオリなものと考えず、時代や地域に応じた特有の社会に由来する概念の存在を強調したデュルケームは、たとえある意味で誤謬であるとしても明確に力を有している宗教を幻想にすぎないと述べることはできなかった。しかし、デュルケームにおける2つの誤謬、つまり、「誤謬=偽」と「誤謬=真実」という相反する概念の違いをしっかりと理解しなければならない。『原初形態』発刊の1年後の講義(「プラグマティズム」講義)では「神話的真理」と「科学的真理」について言及している。前者は「仮象」界における真理、後者が(本発表において限定された意味での)「物自体」における真理を意味しているといえるだろう。そして、デュルケームは、神話的真理においては、実在と一致するから真実なのではなく、創造的力(pouvoir)が実在との一致を生じさせる結果、真実になると答えている。こうして、デュルケームにおける2つの真理論から2つの認識論が見いだすことができる。1つには、社会学の客観性を確保するための認識論(方法論に関連)であり、もう1つには、現実社会における行為主体を重視した認識論(特に宗教論・人間論に関連)である。なお、後者は人々が宗教信念という社会観によって社会をながめさせられているという個人の行為・認識論に発展し、『原初形態』では、デュルケームは他者とのコミュニケーションをはかるために、言語などの媒介手段だけでなく、ある対象を見たときの感覚や理解が同じである必要があることを指摘している。そして、彼は認識が直観 イメージ 概念という層をなして重なっていると述べている。結局、デュルケームにおいて2つの行為論が確認される。文明が人々に言語などの他者コミュニケーションを可能にする媒介物を提供しているというだけでなく、行為主体において感情や欲望すらも含んだ思考のすべてが社会によって方向付けられているというものであつた。他方、明確で確かな行為を知ることのできない「自覚的な人間」は、概念を不完全に内面化しつつ行動し、社会(=実在)との不一致によって反省をうながされる。

そもそも、デュルケームが「プラグマティズムと社会学」について講義した理由から、

デュルケームが「真理論」、社会学における「生活と行為の感覚」、そして「理性」を重視していたことが確認される。「プラグマティズム」講義に限らず、晩年のデュルケームは多くのことを語っている。本発表後の質問では、「現象」と「仮象」の関係の不明瞭さ、「個人」と「人間」の混同が指摘されたが、あわせてデュルケームの著作を厳密に読み直しながら今後研究を進めて参る所存である。

## 第9回研究例会（デュルケーム＝ジンメル合同研究会）報告要旨について

合同研究会の内容等につきましては、2005年3月に発行予定の報告書『高野山カンファレンス2004 デュルケーム＝ジンメル合同研究会』に詳しく掲載される予定です。

### 会員業績

- 池田祥英, 2004a, 「ガブリエル・タルドの公衆論について」『ソシオロジカル・ペーパーズ』（早稲田大学大学院社会学院生研究会）13: 1-14 .  
, 2004b, 「タルド社会学における模倣の諸類型」『社会学史研究』26: 45-61 .  
江頭大蔵, 2004, 「現代家族の動向と規範・規範意識 未婚化・少子化傾向を中心に」『西日本社会学会年報』2: 25-40 .  
大野道邦, 2004, 「文化現象としての自殺 デュルケームの『自殺論』をめぐって」『人間文化研究科年報』（奈良女子大学大学院人間文化研究科）19: 253-263 .  
白鳥義彦, 2004a, 「エスピナスの教育論 デュルケーム教育論との関係を中心として」『日仏教育学会年報』10（通巻番号 No.32）: 111-121 .  
, 2004b, 「フランスの教育」 関谷一彦・細見和志・山上浩嗣編『はじめて学ぶフランス』関西学院大学出版会, 31-48 .  
, 2004c, [ 翻訳 ] ピエール・アンサール著, 山下雅之監訳『社会学の新生』藤原書店, 第三部, 163-225 .  
田中拓道, 2004a, 「フランス福祉国家論の思想的考察 『連帯』のアクチュアリテ ィ」『社会思想史研究』28: 53-68 .  
, 2004b, 「フランス福祉国家の思想的源流（1789～1910年） 社会経済学・社会的共和主義・連帯主義(1)」『北大法学論集』55(2): 27-83 .  
, 2004c, 「フランス福祉国家の思想的源流（1789～1910年） 社会経済学・社会的共和主義・連帯主義(2)」『北大法学論集』55(4): 175-232 .  
中島道男, 2004, 「パウマン社会理論における政治と個人」『奈良女子大学 社会学論集』11: 1-22 .  
藤吉圭二, 2004, 「現代の四国遍路における接待 「配慮無用の親切」という視点から」『高野山大学論叢』（高野山大学）39: 25-40 .  
松永寛明, 2004a, 「日本の刑事司法と観衆 近代的刑罰制度の原型に関する研究」大阪市立大学（学位論文）.  
, 2004b, [ 翻訳 ] マイケル・S・スウィーニィ著『米国のメディアと戦時検閲 第二次世界大戦における勝利の秘密』法政大学出版局（土屋礼子との共訳）.  
山田陽子, 2004a, 「『心』の聖化と現代人の自己形成 『心の教育』における道徳と『心理学』の交錯」『ソシオロジ』149: 85-101 .  
, 2004b, 「現代の『幸福』に関する試論 『心』、道徳、ストレスから考える『よき生』の現形」高坂健次編『社会調査の思想・倫理・効用』関西学院大学社会学21世紀COEプログラム『人類の幸福に資する社会調査』の研究』2003年度研究報告書, 103-104 .  
横井敏秀, 2004, 「デュルケームにおける『自由』の諸相」『富山国際大学人文社会学部紀要』4: 95-104 .

### § 編集事務局より §

ニューズレター第5号は従来よりもかなり短縮版となりました。これは、デュルケーム＝ジンメル合同研究会の内容を、報告書として別途発行するためと、従来掲載されていた2本の書評を割愛したためです。報告書発行費用を何とかまかなうための財政上の理由ということで、なにとぞご理解を賜りたく存じます。また、報告書発行のためご寄付を頂戴いたしました会員の皆様には、深くお礼申し上げます。

2004年は4月に第8回例会を広島大学で、そして9月には高野山大学にてデュルケーム＝ジンメル合同研究会を開催することができました。合同研究会は参加者51名という盛会となり、シンポジウムでの活発な議論はもとより、宿坊「大円院」大広間での懇親会で出席者がコの字型にズラリと着座した様は、実に印象的でした。

2005年は、4月23日（土）に尚絅学院大学（宮城県名取市）にて第10回例会を開催の予定です。共通テーマを「デュルケーム、心理学、タルド」とし、池田祥英会員と山田陽子会員のお二方に報告をお願いしております。皆様ふるってご参加ください。